

# 慈

# 光

第三十四卷 第十一号

63.9.16  
◎

大無量寿経に聞く………  
佐藤 國 抄 留 考 知

花田正夫……… (20)

念仏詩抄……… (17)  
木村無相………

往生浄土について……… (15)  
千葉崇憲………

凡骨日誌抄……… (13)  
—— 仏道を歩む ——  
西元宗助………

御一代聞書讚解……… (10)  
井上善右エ門………

晩年の親鸞聖人……… (6)  
—— 毒とくすり ——  
福島政雄………

信仰のよろこび……… (1)  
近角常観………

## 次

## 目

# 信仰のよろこび

近 角 常 観

## 信仰とは何ぞや

信仰といえは世間では、一往仏を信心することや、仏をたのむことのようなれど、真実の信心というは、心の底より夜の明けることである。今までの凡夫の闇の心の中に、仏の慈悲の光明が射しこんで、信心の暁に達することである。要するに心の革新をすることである。人間の建て直しをすることである。人生の生れ変りである。

## 自覚、覚他

全体仏教ということが抑々人間の生れかわりの教である。仏というは覚である。覚というは先ず自覚することである。釈尊も降魔成道したまいて、無明の闇を破り、煩惱の悪魔を退けて、大光明を放ちて成道したまいたのである。かく御自身が自覚されたるのみならず、一切衆生を覚他せしめたまうのが仏教である。しかもその自覚、覚他が徹底して一切衆生を救済し尽さねばならぬというのが、仏の本願である。

## 信心 歡喜

故に仏教を信仰するというのはその仏の光明に照らされて、従来の迷いの人生をひるがえして、新らしき仏の光明の生活に入ることである。その仏の光明に照らされるとき、我々の心が開発して、天に踊り地に躍るほどの喜びを生ずるのである。これが信仰の喜びである。

それゆえに一時的に喜ぶことではない、主観的に感情的に喜ぶことでもない。心の底より生れ変りて、今までの間違ったる人生を捨てて、新らしき生活に入ることである。故に真実の信仰に入りて、真人間の生活をいとむむことが出来るのである。

## 人生の消極と積極

かくの如く信仰は人間の生れ変りであつてみれば、先ず人生の暗黒なることに気がつかねばならぬ。

門松や 冥途の旅の一里塚

芽出度くもあり芽出度くもなし

一休和尚が、元旦早々縁起でもないことを言い廻られたのも、先ず人生の暗黒の方面を知らせるためである。良莠口に苦し、諫言耳に逆う。芽出度くもあり、芽出度くもなしというが甚深微妙の味の存する所である。

人間は人生の喜ばしき積極的の表面のみを見て、その消極的の暗黒な反面を見ない。それゆえ直に足元をさらわれるのである。真の芽出度さを知るには、先ず芽出度くない方面に眼をつけねばならぬ。真の喜びを知るには喜ばれぬ方面を考えてかからねばならぬ。峨山和尚は、相摸を取るには、先ず臥て相摸をとれと言われたとの事である。臥てかかれば足元をさらわれる恐れはない。進むことを知って、退くことを守らざるものは猪武者である。

## 常・楽・我・浄

人生に対して何人も望むところは、常楽我浄である。常というは常住である、永久なることを欲するのである。何時までも変りなく、真実ばかりでありたいのである。併したとい如何に哲学的に真実を求めても、人間界にこれを望むべからざることである。

次に楽というは、何人も常に楽しみばかりを欲するのである。物質的欲望、肉体的享樂、たとい精神的快樂にせよ、芸術的趣味、人間的情操にせよ、如何に人生を楽しまんとすれども遂に裏切らるるに至るものである。

又何人でも自我の思う通りにしたいものである。現代思想の如きも常に自我を主張して、遂に鬭争を以て人生を解決せんとすれど、自分が我を主張すれば、他人もまた我を主張するものであつて、結局我と我の角突き合ひである。これでは永久に自分の思うようにはならぬものである。浄というは此人生を清浄なるものと考うることである。ところが人生は甚だ穢れたる世界である。現代の青年はこの人生に向つて清浄なる理想を実現せんとして、却つて穢れたる人生を持ちきたすことになるのである。

## 苦・空・無常・無我

かくの如く人生に直に常楽我浄を求めんとするも不可能である。これを仏教の上では凡夫の四顛倒と称して、全く誤れる逆まの見方だと戒めるのである。抑々釈尊が王城を出でて出家したまいたる動機は、四門を出でて老人を見、病人を見、死人を見て、無常を感じられたのが根本である。諸行は無常なり、是れ生滅の怯なり。

色は匂えど散りぬるを、我世たれぞつねならむ。花咲き、鳥歌い、色匂い、春麗かなりといえども、やがて散り行く無常の人生である。してみれば生は苦なり、老は苦なり、病は苦なり、死は苦なりというのが、抑々苦空無常無私の真理である。人生の消極を見ずして、積極ばかりを見ていた人間の四顛倒を戒めて、苦・空・無常・無我を説かれた

のが釈尊の説法の始めである。

現代の青年も自我主張では、最後の平和の実現は出来ぬことを自覚せねばならぬ。そこで無我の世界を実現したいものである。ところがなか／＼無我になり得ざるものである。無常の世界であると分ったところで、結局苦しいばかりでは致方ない。消極のない積極的人生観、即ち常・樂・我・淨の見解が、凡夫の四顛倒であると同じ様に、たとい仏教をききて人生の苦痛を訴え、無常に泣いているばかりでは何の所詮もない。とかく仏教の消極の一面のみを見て悲觀したり厭世思想に陥るようなものは、仏教をききながら、徹底せざるものである。このような聞き方をしたのでない。小乗仏教というのである。釈尊が小乗を説かれたのではない。聴き方が不徹底なゆえに、小乗仏教になったのである。

#### 小乗・大乘

小乗といえは歴史的に原始仏教のことと考えるであろうが、なか／＼そうばかりではない。日本などは聖徳太子が、日域大乘相應地と仰せられて、教理的に云えば大乘仏教ばかり行われて居るなれど、信仰的に云えば、不徹底な聞き方をしたり、説き方をしている小乗の人々ばかりである。小乗の人を声聞とか縁覚とかいって昔から排斥するのであるが、今でも仏教のきまり、文句の説法の声ばかり聞いて、その真理をさとらぬ人は声聞である。一寸したはずみに悟

したり、自分の努力の水泡に帰することに残念がるようになる。つまり人に認められたい心は名利ではないか。我こそと思う心は、無我になり得ない我慢の心である。遂には人を怨んだり、世を呪うたり、様々の心が起るようになる。ここに至りて理想が破壊し、人心の破産が来る。釈尊が菩提樹下に端坐せられたるとき、諸の煩惱の悪魔に囲まれ、無明の暗黒に覆われたまうたというもこれである。善導大師の二河の譬喩に、群賊、悪獸競い来りて、往くも、還るも、止まるも、一として死を免がれずというも是である。私なども三十余年前、白河党に組みし大谷本願寺改革問題の時、ひとたび大煩悶に陥りて、大死一番、遂に絶対の光明に接したのである。

#### 絶対の大慈悲

上記の如き私の心が暗黒であった場合に、私の心持を理解して、如何とも為すべからざる有様を憐みて、飽くまで見捨てぬ友人に遇いたい。此の如き友人は一人で充分である。その代りにはその友人は如何なる場合でも、又如何程悪しくとも、何処までもあきれぬ友人でありたい、友人というよりもむしろ絶対の同情者というべきである。畢竟慈悲の塊で、何処までも私を撰取せねば止まぬという人格であらなければならぬ。是が即ち仏陀である、如来である。仏はこれ満足大悲の人なるが故に。仏心とは大慈悲はれなり。

りたるような心持になって、得意になって居る人は縁覚である、独覚である。正月早々無常や無我の話を聞かされて、縁起かつぐ人はこの不徹底なる聞き方をした小乗仏教である。

然るにこの消極的の苦・空・無常・無我の人生に対して、飽くまでこれを救済すべくあらわれたる積極的の教が大乘である。無常の人生に対して、如来常住の光明があらわれた。苦の人生に対して極楽世界があらわれた。如何にしても我を捨てることの出来ぬ我等に対して、無我の仏があらわれた。この穢れたる社会に対して慈悲の浄土があらわれた。かくの如く凡夫の四顛倒の常樂我淨をすてて、涅槃の四徳たる常樂我淨の如来の慈悲があらわれたのである。これが大乘仏教の極致であらなければならぬ。

#### 闇黒の世界

我等凡夫が本来望むところの常樂我淨なるものは、一旦破壊さるべき運命を持つものである。現代青年の抱ける理想なるものは、一旦行きつまるべき相対的のものである。何人と雖自分が正しいものと考えているが、他人はまた自己を正しいものと考えているものである。畢竟是非善悪なるものは、お互様であって、結局五分五分の争闘である。自分は一身を犠牲にして顧みない、一点名利の心を持たぬと考うるものも、最後になれば、人に認められないことに煩悶

その慈悲が光明であり、その仏の親心が本願である。その親心が我等に徹到したのが金剛の信心である。その信心開發の一念に踴躍歡喜の心が起るのである。親鸞聖人の和讃

○尽十方の無碍光は 無明のやみをてらしつ、  
一念歡喜するひとをかならず滅度にいたらしむ

○無碍光の利益より 威徳広大の信をえて  
かならず煩惱の水とけすなわち菩提の水となる

○罪障功徳の体となる、氷と水の如くにて、  
氷多きに水多く さわり多きに徳多し

是れやがて煩惱即ち菩提、生死即涅槃の天乘仏教の真髓をさわめたもので法喜の高調に達したものである。同じく和讃に、

○慈光はるかにかうらしめ ひかりの到るところには  
法喜をうとぞのべたまう 大安慰を帰命せよ。

此に初めて信仰的法喜法悦が溢れて、世界にみなぎり来るのである。

#### 信仰と秩序

かくして人生が信仰を以て建て直さるのである。秩序ある世界が顕現するのである。かくの如き絶対の慈悲に救済せられて、罪惡自覚の念を生じ、ここに上に対して頭が下りて、自ら上下秩序の觀念が明らかになるのである。聖徳太子の十七憲法に「君則之を天とし、臣則之を地と

す」という君臣の大義が、炳として、赫くのである。恰も富士山が三角形をなして、千古動きなき姿を現わすが如くである。この徹底せる信仰によりて如何なる逆悪の兇徒と雖、廻心懺悔して、正しき道に立ち帰るのである。奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ、親の身捨ててかえる子のため、この歌は私が幼少の時、父が姥捨山の御伽話をして教えてくれた道歌である。親が子のために結んでくれた道しるべを破壊しながら、親を奥山に運んで捨てた不孝の子供が、初めて親の本心を聞きて、あやまり果てて、捨てた籠に親を乗せて帰り、親に孝道を尽したとの話である。

絶対の大悲に救われて、嚴肅なる道徳が建現し来る有様である。私が九歳の時、聞いた話であるが、六十二歳の今日、これ以上の信仰の徹底を味わうことが出来ぬ……略。

或人の歌に

兼脚跡戻り／＼して辿るらん甲斐なきことに心迷いてどある。これは信後生活の基調であらねばならぬ。



## 晩年の親鸞聖人

老年の聖人は、その常陸時代二十七年の生活のことを色々に御追憶になつています。その常陸の方から御同行の人々が、時折に十余ヶ国の境を越えて真剣なおたずねをするということがあり、その御たずねの中には信仰と道徳という問題があつたのであります。これは法然上人の御弟子の間にも問題があつて、間違つた人々は念仏の教は悪人救済の教であるから、おもうままに悪を行つても差支えないという造悪無碍という考えの人があつたのであります。わが聖人の御帰洛後の関東の御同行の中にもかような邪義におちいつた人があつたのであります。それに対し聖人は懇々と戒めておいでになるのであります。

なによりも聖教のおしえをもしらず、また浄土宗のまことどのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のものどもものなかに、悪はおもうさまにふるまうべしと仰せられ候なるこそ、かえず／＼あるべきとも候わず、北の部に

ゲエテの言葉

○

多くの人は自分の知つてゐる事については自慢をし、知らない事にはたいしては傲慢である。

○

一つの時代の中には、その時代を観察すべき地点がない外国のものを繙訳する時には「どうしても訳せない」と云うところまで行き詰らなければいけない、そこで初めて外国の思想と言語とを体得することが出来る。

○

自分の身は小さく限られたものであることをよくわきまえた人は最も完全に近い人である。

○

矢のように過ぎ去る一生涯なのに、或る事に際して、それには自分の年齢が行かな過ぎるとか、又は老け過ぎていくとかで、工合の悪いことが沢山ある。

○

真の自由は、物ごとに、それ相当な価値をみとめることである。

## 福島政雄

○

ありし善乗房といひしものに、ついにあいむつることなくしてやみにしをばみざりけるにや。

○

第一に教というものがなければならぬという聖人の御心の御教を中心とするのであります。教も何にも受けていない放逸無慚の者に対して、どんなに悪を行つても宜しい、悪人救済の念仏であるからというようなことは以ての外であると仰せられるのであります。晩年の聖人には正しい道についての積尊の御教が深く心にしみとおつています。悪の御自覚が実に深いのであります。無量寿経の悲化段、五悪段において、人間の罪惡を懇々と戒められてゐる積尊の御教は弥陀の誓願不思議と信ぜられるほど、深く我が身の罪惡の自覚として聖人は感ぜられてゐるのであります。善乗房といふのは放逸無慚の者で親不孝者でありました。聖人はさような者に近づくことは避けておいでになつたとい

うのであります。自分が悪人を感化してやるぞというよう  
な御態度ではなかったのであります。弥陀の本願が自然に  
無理なく光被する時節を辛抱よく御待ちになりました。

凡夫なればとて、何事もおもうさまならば、ぬすみをも  
し、ひとをも殺しなどすべきかは、もとぬすびごころ  
あらんひとも、極楽をねがい念仏を申すほどのことにな  
りなば、もとひごうたるころをもおもしろいおしてこそ  
あるべきに、そのしるしなからんひとく、に、悪くるし  
からずということ、ゆめ／＼あるべからずさうろう。

ぬすみ心もその他の悪心も、念仏をもうすほどになつた  
ならば、弥陀の大悲に融かされて、自然と自分の悪を自覚  
し、おもしろいおして改まつて来る筈であると仰せられます。

これは非常に微妙なところであります。「無慚無愧のこ  
の身に」と深い反省をなされている聖人には、御自分が  
立派な人間になつたというお心持はないのであります。が、  
しかし「わろからんにつけてもいよく願力を仰ぎまいら  
せば自然のことわりにて柔和忍辱の心も出で来べし」と歎  
異抄にあるような体験を持つていられます。そこから「も  
とひごうたるころもおもしろいおしてこそ」という御言葉  
が出て来るのであります。そしてこれはゆつたりとしたお  
心から出て来る晩年の円熟した聖人のお言葉と感ぜられる  
のであります。

おぎかれとこそ、至誠心のなかにはおしえをのせおわし  
ましてそつらえ。いつかわがころの悪しきにまかせて  
ふるまえとはそつらん。おおかた経釈をも知らず、如来  
の御ことをもしらぬ身に、ゆめ／＼その沙汰あるべくも  
候わず。あなかしこ。

十一月廿四日

親鸞

出世間のころと仰せられてあります。聖人  
はいま仏法にいわれる出世間の心といふところから此の間  
題の終極の点を述べられるのであります。此の世間に執着  
する心が煩惱悪業をもおもうまに振舞わせようとするの  
のであります。聖人は御自分の八十余年の人生の苦しみの  
中を経由しておいでになって、深く世をいとう心を持って  
おいでになります。もとより聖人にも此の世の執着が無く  
なっているではありません。御子様方のことについて執  
着はまだ／＼あらせられるのであります。しかしそれにつ  
けても此の世をいとう心は深刻になつていられるのであり  
ます。世をいとう心、そこから此の世間を超出して浄土教  
の御教を受け、しかもその御教ゆえに此の世間の苦しみの  
中に安住して、執着の心を弥陀の大悲に融かされつつ、悠  
々たる心境を以てその晩年の生活なされました。そこに罪  
悪煩惱も無理なく自然に融かされて行くのであります。

煩惱にくるわされて、思わざるほかにすまじきことをも  
ふるまい、云うまじきことをも云い、思うまじきことを  
も思うにてこそあれ、さわらぬことなればとて、ひと  
のためにもはらぐろく、すまじきことをもし、いうまじ  
きことをも云はば、煩惱に狂わされたる儀にはあらで、  
わざとすまじきことをもせば、かえす／＼あるまじきこ  
となり。鹿島・なめかたのひと／＼のあしからんことを  
をば制したまわばこそこの辺よりいできたるしるしに  
てはそつらわめ。ふるまいはなにごとともころにまかせ  
よと云いつるとそつららん、あさましきことに候。

ここに造悪無碍の態度を懇切に戒められているのであり  
ます。煩惱に狂わされて悪を行つたというのも宜しいこと  
ではなけれども、それはまだ恕すべきところがなないではな  
い。はらぐろく悪を行うということになれば、造悪無碍で  
あつて、これは実にあさましいことであると懇ろに御戒め  
になるのであります。

この世のわろきをもすて、あさましきことをもせざらん  
こそ、世をいとい念仏申すことにてはそつらえ。としご  
ろ念仏するひとなどの、ひとのためにもあしきことを  
もしまた云いもせば、世をいとうしるしもなし。されば  
善導の御おしえには、悪をこのむひとをばつつしんでと

常陸時代の御回想の中には明法房があらわされて来ます。  
いわゆる辯円の転向物語は多少戯曲化されているかも知れ  
ませんが、聖人を敵視していた者が転向して帰依したとい  
う事は本当でありましょう。造悪無碍の者が問題となつて  
いる時に聖人は明法房の事を想起なさるのであります。

明法房などの往生しておわしますも、もとは不可思議の  
ひがごとをおもいなどしたるころをひるがえしなどし  
てこそそつらいしか。われ往生すべければとて、すまじ  
きことをもし、思うまじきことも思い、云うまじきこと  
をも云いなどすることはあるべくも候はず。貪欲の煩惱  
に狂わされて欲もおこり、瞋恚の煩惱に狂わされてねた  
むべきもなき因果をやぶるころもおこり、愚痴の煩惱  
にまどわされておもうまじきことなどもおこるにてこそ  
そつらえ。めでたき仏の御ちかひのあればとて、わざと  
すまじきことをもし、おもうまじきことどもをもおもい  
などせんは、よく／＼此の世のいとわしからず、身のわ  
ろきことをおもいしらぬにて候えば、念仏にこそろざし  
もなく、仏の御ちかひにもこそろざしのおわしまさぬに  
て候えば、念仏させたまうとも、その御ころろざしに  
ては順次の往生もかたくや候うべからん。よく／＼この  
よしをひと／＼にきかせまいらせたまうべく候。  
明法房の往生を御ききになつてこのお手紙を書いておい

でなるのでありますから、聖人としての感慨は実に深いものがあらせられたのであります。なおねんごろに色々な御教化のお言葉があつて、最後にまた明法房のことにそえて、くすりあればといつて毒を好むべからずと仰せられています。

明法房の往生のことをききながら、あとをおろそかにせんひとくはその同胞にあらず候べし。無明の酒にえいたるひとにいよくえいをすすめ、三毒をひさしくこのみくらふひとにいよく毒をゆるしてこのめと申しあうて候らん、不便のことに候。無明の酒にえいたることを悲しみ、三毒をこのみくうて、いまだ毒もうせはず、無明のえいもいまださめやらぬに、おわしまして候ぞかしよく御ころえそ、うろ、うべし。

聖人は明法房が浄土往生をとげたことをおよろこびになつています。それについて転悪成善の仏力ということをしみじみと感ぜられるのであります。弥陀の本願力は遂に三毒を転じたまうのでありますけれども、さればと云つてわざと悪を行ずるのは本願力に目ざめていないのであります。そのことを聖人は繰りかえし懇切に述べておいでになるのであります。

なお毒とくすりのお諭は建長四年二月二十四日附のお手紙に更に懇切にお述べになつていられます。此のお手紙に

もいろく信心不徹底の人が法然上人の御時からあつたことを述べられて、さてそのあとに次のようにお書きになっています。

まずおのく、むかしは弥陀のちからをも知らず、弥陀の御方便にもよつされて、いま弥陀のちかいをききはじめしより、無明の酔いもようくすこしづづさめ、三毒をもすこしづつこのまずして、阿弥陀仏のくすりをこのみめす身となりておわしましあうてそらうぞかし。しかるになお酔いもさめやらぬに、かさねて酔いをすすめ、毒もきえやらぬに、なお毒をすすめられそらうらんこそ、あさましくそらえ。

これは信仰によつて道德の世界がほのぼのと開けはじめることを、如何にもそのままにお述べになつていられるのであります。聖人御自身では道徳堅固になつたなどとは少しもお考えになつていませんが、併し自然のことわりにて柔和忍辱の心も出てくるという境地は、晩年の聖人においてはたしかにひらけておいでになつたに相違ないのであります。さればこそ信心不徹底のひとくを御戒めになる態度なりお言葉なりが非常におだやかで懇ろであるのであります。

晩年の親鸞より――

## 蓮如上人御一代聞書讚解

### ききわけてえ信ぜぬもの

「他力の願行を久しく身にたもちながら、よしなき自力の執心にほだされて空しく流転しけるなり」と候ふを「え存ぜずさふらふ」由申上げ候ところに、仰に「ききわけてえ信ぜぬものことなり」と仰せられ候ひき(第九条)

いまここに問われている言葉は『安心決定鈔』末第二条の句であります。即ちその文に、「わがちからも、さとりもいらぬ他力の願行をひさしく身にたもちながら、よしなき自力の執心にほだされてむなしく流転の故郷にかへらんこと、かへすがへすも悲しかるべきことなり。釈尊もいかにばかりか往来八千返の甲斐なきことをあわれみ、弥陀もいかにばかりか難化能化のしるしなきことを悲しみたまふらん。もし一人なりともかかると不思議の願行を信ずることあらば、まことに仏恩を報ずるなるべし」とあります。

### 井上善右衛門

いま疑問を蓮如上人に提したのは法専坊空善であります(空善日記)、その問いの意は、おそらく「他力の願行をひさしく身にたもつ」ということと「よしなき自力の執心にほだされる」ということが、どういふ関係にあるかが判断せぬという点にあつたのであります。それに対して上人が問題の焦点を押えた実に明快な回答を与えられたのです。即ち「ききわけて、え信ぜぬ」ものことだと申されました。『聞書』第一七三条に「不審などを申すにも、多事をただ御一言にてはらりと不審齎れ候ひし」とありますが、まことに上人の回答ぶりが躍如と俣ばれるようです。言葉の説明や道理を説かれるのではなく、問題の本質をつくのはただ一言で足りります。「宗教の問題は外から説明しても何にもならぬ。その事を決するのは問題の本質そのものである」とシユライエルマツヒエルが宗教講演で語っている言葉が思い出されます。

さて「ききわけて、え信ぜぬ」ということですが、「ききわける」というのは今日の言葉に置き換えれば、理解するということでしょう。言葉を耳で聞いて、事の次第を頭で了解し領くということでありましょう。しかしそのような「聞」が必ずしも「信」につながるではありません。信に転ぜぬ聞もあるわけです。事の道理を心得て理解はしているが、それは結局脳裏の描写であって、如來に値遇したのではない。頭は領いても胸ははまだ領いてはいないのです。これは聞法の越えねばならぬ一つの山というべきでしょう。

ある座談会で一人の中年婦人がこんな質問をされました。「われわれはこの眼で仏様を見ることが出来るのでもなければ、直接お浄土を知ることが出来るのでもありません。ただおききしたままに、仏様のお心を信じる外にはありません。それが「聞即信」ということであると思っておりますが、如何ですか」と言われました。言葉はその通りでも、どうも何かおぼつかないものが感じられるのです。自分の思いに念をおさねばならぬのはどういふわけでしょう。信心というのは事実の体験であって、ある話をただそのままに聞いているのとは違う。もし人の話をそのままに受け取っているだけなら、別の人が現われて、それは間違っている本当はこうだといわれたらどうなるでしょう。おそら

ません。宗教は人間の生命に顕現する主体的な体験の真実であって、外界を観察究明する科学とは領域を異にします。従って科学的思考をもって宗教的真理を云々することは全く見当違いです。このことは先ず明瞭にしておかねばなりません。科学主義の横行する今日、こんな解りきつた誤解や思考の越權が往々にして生じているのは遺憾なことと思えます。真実の宗教は何よりもまず己が生命の聲に耳傾けることから始めねばなりません。その生命というのとはより肉体的生命のことではなく、人間の基盤をなす肉体的生命の意味です。何のために生きているのか、如何に生きるべきか、生甲斐とは何か、それらは最も根本的な人間の生命自体の問いかけです。こうした問いに科学が答えようべくもないのは言うまでもありません。生命の切実な問いかけに自から取組んでゆくところに「聞思」の道が必ず開かれます。そしてその究極するところ、本願という生命の畢竟依に値遇せずにはおられないのであります。それはどこまでも生命そのものに顕われる自覚的出来事であり、またこれをただの理屈として領いてみても、自分の執心がそのまま中心の座を占めているかぎり、画餅に終らざるをえないのは当然です。聞きわけるということは、人間の

く動揺せずにはおられないことになるでしょう。

甲斐和里子女史のうたに、

谷ひとつへだてて啼けどころしてきけばきこゆる

山ほととぎす

と一音があります。ほととぎすは山ひとつへだてた彼方の山で啼いている。だから眼には見えない。けれども耳をすましてよくきけば、その啼いている声がいま此処に立っているこの自分にはつきり聞こえて来るというのです。彼方の山でほととぎすが啼いているのだそうだと、人からきいてただそのままに肯定しているのとは違う。世間で一般に信じるというのはそうした間接的内容として信じるのが普通でありますけれども、宗教的信は感動の直接的内容をもつものです。ほととぎすの声を現にきいている人に対して、ほととぎすなど啼いていませんよと言っても、その人の心が動揺するわけではないでありましょう。「よき人の仰をこうぶりて信ずるほかに別の仔細なきなり」（歎異抄）というのは、言葉の表面だけを見ると間接的信のように受け取られますが、実はそうではなく、よき人の仰をたまわって、わが計らいのむなしかったことに気づかされ、如來の悲心に触れまつることをえたよろこびの告白であります。よき人と如來とが一つに融けてゆるぎない撰取の悲心に値遇するをえたのです。それは最早や直接的事実という外あり

理性を納得せしめるという点では意味のあることです。しかしそれが直に心の開明となるわけではありません。聞知と聞信との異なることを上人は「ききわけて、え信ぜぬもの」と示されましたが、聞を信への道とする浄土真宗においては最も肝要な誠めとして、この御指摘をわれわれも十分味わせていただかなければなりません。聞くことが素直であった古人の上にさえ問題となったことなのです。まして聞くことが理知の思考に傾きがちな現代人のわれわれにとつては一層深い反省をもって、この一条のこころを玩味させていただかねばならぬと思えます。

### 御 紹 介

蓮如上人御一代聞書讀解

井上善右衛門著

発行所

京都市下京区花屋町通西洞院西入  
永田文昌堂・振替京都九三六番

定 価

五五〇〇円

# 凡骨日誌抄

## 仏道を歩む

今までも、なんどもお仲人をさせていただきましたが、このたびの仲人役ほどありがたくもあるし、晴がましいことはありませんでした。まさに一世一度のことでありました。それと申しますのも、足利浄円先生の孫の龍山永明君と、清沢満之・暁烏敏両先生の曾孫の暁烏涼子さんのご結婚でありましたから。

さて、九月二十五日(土)の午前十一時、広島市沼田町の専念寺本堂で、釈香雲師司婚のもと、いともおごそかに結婚式がとり行なわれました。この春から病床にあつて再起不能かと案じられた、新郎永明君の父君、龍山真之住職が神々しいほどに晴れやかに壬生子夫人(足利浄円師次女)と共に着座。それと相對して新婦涼子さんの父君、石川県松任市明達寺の暁烏哲夫住職(清沢満之師孫、大谷大学教

## 西元宗助

授)も宣子夫人(暁烏敏師孫)と共に着座。一同そろって、ご本尊に向つて合掌し礼拝し、お念仏申していると、この専念寺の歴代のご住職はじめ、今はお浄土の浄円先生も、敏先生も、ましますが如しでありました。願わくは仏道をしっかりと歩んで、真実の信心に生きよと、仰せのようでありました。

この日懸念された十八号台風も、案外無事に広島を通過して雨もやみ、午後は場所を、市内のグランドホテルにうつして、盛大な披露宴となりました。

新郎新婦紹介のために立ちあがった私、いささか、あがつてしまいました。走馬燈のようにクルクルと、いろいろなことが頭の中に浮かんでくる。郷里鹿兒島の高校生のころ、

はじめに暁烏先生の御講話を承ったときの感動(先生の鹿兒島におけるお宿はいつも私の伯母の宅でありました。それから京都大学に入つてまもなく、足利浄円先生にお会いしたときのはろこび。それは寂かな深い深い欲びでありました。そしてそれらの背景ともなり根源ともなる清沢満之師のこと。わたしは、この日のスピーチのための原稿をしたため、それを清書して手に握りしめていたのですが、感激のあまり、それを一度もみないで、ひたすら、仏祖ならびに宗祖の遺弟とし、ともに仏道を歩まんことを念じながら、新郎新婦紹介の役目をはたしたことでありました。

来賓には龍谷大学教授・勸学の山崎慶輝先生や京都・高倉会館々長の新田壽先生など、それに御門徒や友人、知人。また龍山、足利、清沢、暁烏の名門の一族の方々が参加なさつて、近ごろ珍しく和かな会でありました。ただ台風禍のため、鹿兒島県志布志の陣崎康氏ご夫妻(金剛寺)など、二、三の参席中止は残念なことでありました。

○

前後しますが、九月の秋彼岸には、招かれて奈良の吉野下市の仏教会主催の戦没者追悼会に、また愛知県蒲郡の西福寺さんのご法要に参らせていただく。わたしの心中を、たえず去来しましたのは、あの大戦で

なくなられた方々のこと、そしてその御遺族のことでありました。ことに御遺族のある婦人の「主人は、どうなっているのぞいませう、靖国神社なんぞでしょうか、いやお墓なんぞございませうか。それとも」という、切ない問いでありました。

わたしは、その御婦人に、そのことを知るためにも、その前に、自分はどうなるのかを問題にしなければならぬでしょうと申しあげて、わたしたちが心に浄土をいたたくことが大事であると、すなわち本願を信じて念仏申し、真実の信心に生き、生かされるほかに、戦没者の方々も浮かぶ瀬はありませんし、また世界永遠の平和への道もございませんと、心をこめて申しあげてみたことでありました。

これを認めている只今、ことしも亦、萩の花がいつぱい、わが家の裏庭に咲きこぼれています。この萩を眺めていると、今から満三十三年前の秋、シベリヤから舞鶴に着いたことを想いだし、まことに感慨の深いこととございます。

(九月末記)

なお伝道協会「仏教聖典」のエスペラント訳、浅野三智師おひとりでお訳しになったように、いつかの本誌に紹介したのは、私の書き誤りでありました。数名の方々の分担でありましたこと、先生の御申出により、つつしんで訂正いたしておきます。

○



## 往生浄土について

久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、  
いまだ生れざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと  
まことによくよく煩惱の興盛にそうろうにこそ、名残り  
惜しくおもえども娑婆の縁つきで、ちからなくしておわ  
るとき、かの土へはまいるべきなり。歎異抄九章後半。

今日酒見忠勢先生の祥月御命日である。そのおかげか  
浄土について味わさせていただいた次第である。  
お念仏申して三十年になるが、煩惱即菩提、生死即涅槃  
のことはこの世の上のこととして喜んで来たのである。  
どのような苦惱もお念仏によってとかされ、解決するこ  
とに満足して来たのである。現実のよろこびに溺れてお浄  
土はおぼろな彼方にあり、つよい要求をもたなかったもの  
である。しかし昨年暮れ頃より浄土が近くになりつつある  
ような感じがするのである。浄土が無ければ真の救いは成  
り立たないことに気づかされつゝ、あるのである。

産を忘れていたようなもの、利子だけに満足して元金に気  
づいていなかったようなものである。ただここでことわつ  
ておきたいことは、そのお小遣や利子をもらえないものは  
元金や大財産をもらう身になっていないということである  
入正定聚とはこのことである。往生は平生に決すとはこ  
のことである。

苦惱の旧里はすてがたく、安養の浄土は恋しからず、名  
残り惜しくも娑婆の縁つき、泣く泣く終るときこそ、かの  
浄土がわれを迎えて下さるのである。お念仏にはこの世と  
あの世の区別はないが、わが肉身の上に区別しないわけに  
いかぬものがある。だから念仏すれば現世には最上の利益  
を得、来世には無上の証を興えられるのである。それが如  
来の本願である。

「いかに慈悲を喜ぼうが、光明中に包まれていようが、  
この世にある間は思うようにならぬ。しかるにそのしてみ  
よう無きを、どこどこまでもお見捨てのない慈悲に摂取  
されて往生させて貰われた」とは、父君の御往生に、浄土  
への後ろ姿をおがまれ、さらに愛児を失われて「人間の力  
で、ああも、こうもと苦心しても、一分一厘どうにもなら  
ぬ。しかもああであったら、こうであつたらと、諸行無常  
の道理と知りつつも、なお愚痴のやまぬものである。それ  
をお見とおしの如来さまにすべてをおまかせし、そのうえ

## 千葉 崇 憲

蓮本千秋先生のお葬式が四月三十日に行われたと聞く。  
まだ三十七才であられたと思う、中学の体育の先生で元  
氣にあふれた方であつた。昨年、五月と八月に二度お会い  
しただけであつたが、今にして思うと前世来のご法縁が深  
かつたのではなかつたらうか。三月末、ご入院、不治の病  
とうけたまわり、求道会のプリントをお送りしたが、一月  
たったばかりで、すでに御往生と聞くのである。人生まこ  
とに無常である、私のこうして生きていくことが不思議な  
くらいである。御存じの如く私の二男も不治病といわれて  
医薬も親の辛苦も、子供のいたいたしい努力もむなしかつ  
たのである。わが苦悩の上にくぐまられるお念仏はありがた  
いけれども、つくるもつくらざるも皆罪体、思うも思わざ  
るもことごとく妄念のままにどうにもならないのである。  
このどうにもならないものがいきつくところ、全くすくわ  
れる世界は安養の浄土のほかにあり得ないのである。思え  
ば、わずかのお小遣にうちようてんになって、肝心の大財

で親として、なすべきこと、できるかぎりのことをするよ  
りほかはない」と子供の病をとおして近角先生は感ぜられ  
たという。よくなるうと思つてもよくなれぬのが闇である、  
名残りおしくとも縁つきたたら逝かねばならぬのである。そ  
のどうにもならぬもののために「汝一心正念にして、ただ  
ちに来れ、われ能く汝をまもらん」とよんで下さるのであ  
る。池山榮吉先生は「オネガイダカラスグキテオクレヨ」  
とこれをよろこばれたという。このおすくいなくしては、  
どうにもならぬことを味わわせていただいたことである。  
「惑染の凡夫、信心発りぬれば、生死すなわち涅槃なりと  
証知せしむ」

とは、どうにもならぬ心と身をもちながら生死即涅槃の  
おさとりを得させていただく身と定まるのである。この世  
では私の煩惱を離れてくださらぬお念仏をいただくのであ  
る、ほのかにお浄土をかんじさせて頂くのみである。庄松  
同行が、「極楽の隣座敷に寝ている」とよろこんでいたとい  
うが、極楽は遠いところではなく、往きがたいところでは  
ない。平生いただくところの念仏に連なっている。正定聚  
とはこの隣座敷の住人のことである。ここに苦悩の中にい  
て苦悩をこえさせてくださるのである。

琴平求道会、第二十五回。昭四十一年五月十八日夜。

念仏詩抄

香師におおせに  
ウタガイのはれざるワケニ  
一 真実大事のおもいより聞かぬゆえ  
二 わが心の善悪のみにかかわるゆえ  
三 如来真実のまことを知らざるゆえ  
その者をあわれみたま  
今よびたまう  
ナムアミダブツと  
又よびたまう  
ナムアミダブツと  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

木村無相

二種深信  
香師におおせに  
コウのアーの分別はいらぬ  
出離に手がかりのつきた者を  
助ける、タノメのお言葉の下で  
おこる思いが  
すがる思いなり喜ぶ思いなり  
まかす心なり

ご化導のお力で  
無明のヤマイが見えてくる  
ウタガイやぶって下さるる

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

お呼び声一つ

香師に信いわく  
私はこれまで持ちならべておりました  
信心も安心もドコへかいつてしまいま  
して

ただもうお呼び声一つがツエとも力と  
もタノミきらるるばかりでござります  
と申されければ香師におおせに  
それが仕おおせたのじゃ  
それでもうよいと捨てておくのではない  
聞いては喜び／＼しておるのじゃほどに

お呼び声一つ  
お呼び声一つ  
ナムアミダブツの  
お呼び声一つ

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

二種深信

香師におおせに  
香山院いわく  
二種深信を信じたのなれば  
コウのアーの分別はいらぬ  
出離に手がかりのつきた者を  
助ける、タノメのお言葉の下で  
おこる思いが  
すがる思いなり喜ぶ思いなり  
まかす心なり



手がかりつきたが機の深信――

ミダをタソムが法の深信のこころをいふに、  
すがるほかなしと誓てアハンのひびきをこ

まかすほかなしと誓て――

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツ

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

香師おおせに――

「まだウタガイ晴れねども

「聴聞してウタガイ晴れたい」と

思うは――

弥陀に待たる身なり

ヨソから帰る子を持つは親――

待たるは子なり――

他人は待たぬ――

どうでもウタガイ晴れぬなら

### 大無量寿経に聞く(三)

三 久遠実成――十劫成仏

原因があつて、縁を待つて、結果が生じる。これは所謂  
因縁果の道理で、誰しもよく知るところである。これと逆  
に、果があつて、縁に従つて、因に向うことを知らされる  
のが、久遠実成の仏が、法蔵菩薩とられて、種々に苦行  
を積み、十劫の昔に阿弥陀仏となり給うた姿である。

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまえり  
法身の光輪さわもなく 世の直冥をてらすなり

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とききたれど  
塵点久遠よりも ひさしき仏とみえたまう

貴金子大業師はこの事を解り易く説明せられてゐる。即ち  
人は親になつて、そこから真実の親にならうとする願ひに

親が待つて待つてると思ふべし

待ちかねさせられて

ナムアミダブツと思ふべし

今よんでいる

今よんでいる――

出願の手紙に云ひのきき書き

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。

ナムアミダブツを祈りてござります。



### 花田正夫

燃えて、子の身になつて育てるように、久遠実成の弥陀仏  
が、おのれと造る罪業のために、生死の苦海に沈みきつて  
浮かぬ瀬のない衆生をみそなわして、衆生と一つ身になつ  
て救済して下さるのである。

子の母をおもうがごとくに衆生仏を憶すれば  
現前当来とおからず 如来を拝見うたがわず

と和讃にあるが、子は親心を知らぬけれど、親は昼夜に  
忘れることはない、この親心が子に沁みとおる時、子は親  
を慕いはじめぬ。仏とも法とも知る力のない我等であるが、  
それを飽くまでも憐愍して下さる仏心と知らされて、現在  
から未来にかけて何時でも何処でも御一緒して下さること  
を謝し、念仏を申させて頂くのである。

従果向因の仏心、身を捨てられて我等と一つ身となつて

下さる仏ましましてこそ、智目、行足のない我等も光明の世界に引き入れられるのである。

わが子のために夫王が獄中に幽閉せられた時、これを救おうとしてかえって宮殿深く閉じこめられた韋提希が、救いを求めた時、釈尊はその前に十方諸仏の浄土を示されたのである。その時「諸仏の浄土は皆立派でありますが、母であつて子を導き得ず、后であつて王をも救い得ない、無能無力の身には、とてもその浄土に生れるための行を完うすることは叶いません。誰この身に向う様から慈悲の手をさしのべて下さる弥陀一仏に帰しまつるばかりであります」と申し上げると、釈尊は微笑して嘉されてはいる。親鸞聖人もまた、諸善万行の道を二十年つとめられて、いずれの行も及び難い、地獄一定の身と知られて、二十九歳に弥陀一仏によられたのである。しかも、

弥陀の浄土に帰しぬれば、すなわち諸仏に帰するなり  
一心をもて一仏をほむるは無碍人をほむるなり

南無阿弥陀仏をととなれば十方無量の諸仏は  
百重千重圍繞してよろこびまもりたまふなり

とあるように、弥陀一仏によつて救われて見れば、そこ

に諸仏の御真意も知らされ、十方諸仏に謝しまつる時、諸仏もまた行者をよろこびまもつて下さるのである。

私事で恐縮であるが、青年の頃、孔子の教について行けず、ソクラテスに「汝自身を知れ」と云われても知るすべもなくなり、聖書によつて、愛の神を求めたが、親をさへ火鉢扱いする冷酷な身には、そこからも漏れてしまつて、最後に下座行を教えられたけれど、空っぽの身には頭を上げようとすゝる妄念ばかりで、とうとう八方塞がりになつた時、歎異抄を教えられ、そこに親鸞聖人御自身が、「煩惱具足のわれわれはいずれの行にても生死を離れることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のため云々」と仰言り、また「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」ともお述べ下さつて、たすかるべからざる者お目当の御本願を知らされ、自然に私の行くべき道が定まつたのである。

しかもそこに立つて、一切の聖賢の教を改めて読み直すと、それは私自身を写し出して下さつた鏡であつたと知らされ、御禮を申さず居られなかつた。と同時に聖賢方もお歡び下さることを事毎に感佩しはじめようになつた。

近角先生は「始めあつて終りのない仏がありがたい」と

言われている。久遠の仏だけでは自分に関係のないことになるが、法蔵菩薩となつて下さり、四十八願を起こして、その成就のために兆載永劫の間無量の徳行を積まれ「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、欲望・瞋想・害想を起さず、色・声・香・味・觸・法に著せず、忍力成就して衆苦を計せず、少欲知足にして染・患・痴なく、三昧常寂にして知慧無碍なり。虚偽諂曲の心あること無し。和顔愛語して意に先だちて承問す、勇猛精進にして志願倦むこと無く、専ら清白の法を求めて以て群生を惠利す云々」とある。これら皆、衆生が三毒の煩惱が熾盛で、はてしなく迷ひ行く姿を照覽されて、そのために発起された徳行である。衆生が無明のために真如の世界から迷ひ出たために発起せられたので、私のための本願であるとしらされるのである。

某画伯が、幼児に食物を与えている母親の絵を描いた。これを見た子供を持つ親が、私は子に食物を与える時、子供よりさきに口を開けるが、この絵は口を閉じたままであると云つて笑つた、と云う話がある。親はいつも子と一つ身になつて育てる、まして弥陀仏の一挙手一投足は皆衆生のためである。

### 三 汝自当知——非我境界

法蔵菩薩が世自在王仏を讀えまつたのち、「世尊よ、我無上正覚の心を發せり、願わくば仏、我が為に広く経法を宣べたまえ。我まさに修行して仏国の清淨莊嚴の妙土を撰取すべし。我をして世において速に正覚を感じ、諸の生死勤苦の本を抜かしめたまえ」と願われると、「修行する所の如き莊嚴仏土は汝自ら當に知るべし」と。菩薩は更に仏に白さく「この義弘深にして、我が境界に非ず。唯願わくば世尊、広く諸仏如来の浄土の行を敷演したまえ、我これを聞きおわりて、まさに説の如く修行し、所願を成満すべし」と。その時、世自在王仏はその高明の志願の深広なることを知り、即ち為に経を説きて言わく「譬えは大海の一人升量せんに、劫数を經歷せば、なお底を窮めて、その妙宝を得べきが如し。人至心に精進して道を求めて止まざれば、かならず正に剋果すべし、何の願か得ざらん」と讀えられて諸仏の浄土を悉く現じたまうたのである。

晚鳥敏師は、このところに非常に心うたれて、よく讚仰されたので私の学生時代から心に刻まれたところである。

龜はその甲に相応した穴を掘る、我々は何事も自己流に解釈して事足りるとするのであるが、自分の力の限界を知らないととんでもない間違ひにおちる。菩薩はすでに王仏の徳光に浴して、我が身は聚墨のごとしと自照していら

る、そこに非我境界とこたえられたのである。

さて、世界の四聖の一人、ソクラテスは「我は何事も知らざることを知れり」と表白し、一切人と共に、その愚さの原点に帰って共に道を求めてやまぬものがあつた。

俳聖芭蕉は、所謂つくつた俳句をすてて、枯枝に鳥とまじりけり秋の暮、といただいた一句から蕉風の世界が広げられている。そこに手にもの持たで、自然界に没入し、竹のことは竹に問え、松のことは松にならえと云い、見るもの花にあらざるといふことなしの妙境に遊んでいる。

無一物中無尽蔵 有花有月有楼閣、とはよく聞くことであるが、そこに大道無窮の白道がひらける、善財童子の求道も、文殊菩薩（仏智の権化者）の教えをうけて、自分の煩惱を主とした愚かさを知り、善知識の仰せのままに五十三の知識を歴訪して成仏している。

さて、蓮如上人は「心得たと思ふは心得ぬなり、心得ぬと思ふはこころえたるなり。弥陀の御たすけあるべきことのとつとさよと思ふが心得たるなり。すこしも心得たと思ふことはあるまじきことなり云々」と仰言っている。

真の親子の間には、親子であるの思いは無用である。それが要るのは、義理の親子である。信心もまた心得顔では仮の信心で、自力の信心である。

夢中夢と覚えぬように、愚かな私は頭を下げるどころかあげよう、あげようとはばかりしている。こうした身に聖人のこのお声「内は愚にして外は賢なり」「小慈小悲もなければとも名利に人師このむなり」と聞かされて、私自身を照らし出され、ここまで御見抜き下さつた如来大悲の本願念仏でましましたかと、渴仰申している。

「法は人によつて伝わる」と聞いているが、もし人格をとおさずに法を聞くと概念にとどまり勝ちである。ここに法が身についた人に接して、法が生きたまこととして伝わってくる。私にとつては今一人の私になつて下さる親鸞聖人をおして、少しの矛盾もなく極く自然に、一切の法が温かい血の通うたまこととして伝わってくださる。

真の知識にあうことはかたきが中になおかたし  
流転輪廻のさわなきは 疑情のさわりにしくぞなき

曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき  
本師源空いまさずば このたびむなくすぎなまし

と聖人も、よき人法然上人に導かれたことをおよろこびになつている。

念仏の雲にあこがれて握らんものと山の上、知らずわれみ仏に抱かれてありしを、と種々に苦労したが、どうしても自分握らうと種々に苦労したが、どうしても得られず、ふと気づいて見れば、すでも抱かれていた、と、絶対他力の世界がひらけた人の喜びの歌である。

親鸞聖人の八十八歳の自然法爾章の結びは  
よしあしの文字をもしらぬ人はみな  
まことのこころなりけるを

善悪の字しりがおは  
おそらごとのかたちなり  
是非しらず 邪正もわかぬこの身なり、  
小慈小悲もなければども  
名利に人師をこのむなり

賢者の信を聞きて 愚禿の心を顕わす  
賢者の信は 内は賢にして外は愚なり  
愚禿の心は 内は愚にして外は賢なり  
と巻頭に特筆していられる。

私はここに、みのある程頭の下がる稲穂かなの古句を思い併せる。空っぽの稲の穂は頭をあげているが、実の熟したものは頭がさがっている道理であるが、狂人が狂と識らず

しかしよき人とは、月さす指である。聖人も仰言るよう  
に「親鸞弟子一人も持たず、親鸞何をおしえてか、わが弟子と云わぬ。如来の教法をわれも信じ人にも教えきかしむるばかりなり」とくりかえされている。

釈尊の最後の説法について、中村元氏の釈尊伝によると「阿難よ、修行僧らはわたくしに何を待望するのであるか？ わたくしは内外の区別なしに法を説いた。完き人の教法には、何ものかを弟子に隠すような教師の握拳は存在しない。わたくしは修行僧の仲間を導くであろうとか、或いは、修行僧の仲間はわたしに頼っている、と思ふことがない。……阿難よ、わたしはもう古い朽ち、齢を重ね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達して、わが齢は八十となつた。阿難よ、譬えば古ぼけた車が革紐の助けによつてやつと動いて行くように。阿難よこの世で自らを鳥とし、自らをよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」

と仰言っている。そこに釈尊の中に聖人を見出し、また聖人の内に釈尊の徳光を感佩申しておる。無我の人を通して真実が伝えられ、時代と国境を越えて不滅の光を放つて下さるのである。

# あとがき

読書の秋となりました。聖賢の方々が残して下さったお言葉に育てられて心のみのりを迎えたいものであります。

近角先生の一文は、常楽我浄を願って行き詰る外のない人生に、私共が願わず、求めない先に、なくてはならぬ光明の道を仏はお与え下さることを詳説して下さいました。或日の先生の御講話に「暗い部屋に電灯がつくと、天井は上、床は下と分つて来る。煩惱に曇らされた私共も、仏様の光明に闇が破られて、初めて人生の秩序が現われる」と力をこめて仰言つたことを思い浮かべました。

福島先生は御晩年の親鸞聖人の信味をお述べ下さいました。板敷山で聖人をあやめようとした山伏辨円が、聖人に接して、害心が転じて師法房と名のつて篤信の生涯を終りましたことを聖人は非常にお慶びになり、その亡きあとも皆の者も手本としてあがめよとお勧めになりました。

井上様の一文は、最近出版して下さった書の最初のものであります。再び御紹介させて頂きました。世上一般の学問は、智解で間に合いますが、信仰の上では、体解、身読が大切であります。上人が聖教読みの聖教知らず、と誠められるところであります。

西元様の「仏道を歩む」は、生活と信仰が一枚になっておられることに教えられました。

千葉崇憲様は香川県の方であります。近角先生と御縁が深かった酒見忠勢先生に手をひかれた信を行く旅人です。 「平生業成」のお味に立たれて、「体失往生」の深味を誌して下さいました。

木村様は近頃、唯信鈔文意にある、「釈迦如来よろずの善の中より名号をえらびとりて五濁悪時、悪世界、悪衆生、邪見、無信の者に与えたまえるなり」の一句を縁ある人々にいつもよろこんで述べていられます。

（お詫び）十一月の例会は休講させて頂きます。

定 価 半 年 八〇〇円（送共）  
一 年 一六〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上町 二ノ八八  
発行人 花 田 正 夫

編 集・発行人 電話八二一〇七〇三七番  
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印 刷 坂 部 光 雄  
名古屋市南区駈上町 二ノ八八

発 行 所 慈 光 社  
振替口座名古屋六一〇四七〇番  
郵便番号 四 五 七